

令和6年8月23日(金) 令和6年度第2回射水市内川未来戦略会議 議事要旨

< 開催概要 >

- 1 開催日時 令和6年8月23日(金) 16:30~18:00
- 2 開催場所 高周波文化ホール3階第3研修室
- 3 出席者(五十音順)
 - 明石 あおい 株式会社ワールドリー・デザイン代表取締役
 - 五十嵐 友輔 越中祭青年会副会長
 - 加治 幸大 株式会社imizutto 代表取締役
 - 木村 広 株式会社新湊観光船取締役専務
 - 高木 新平 株式会社ニューピース代表取締役 CEO
 - 中川 めぐみ 株式会社ウオー代表取締役
 - 永谷 亜矢子 立教大学経営学部客員教授
 - 野口 和宏 富山湾しろえび倶楽部発起人
 - 福田 和則 株式会社エンジヨイワークス代表取締役
 - 牧田 和樹 一般社団法人射水市観光協会会長

< 議事次第 >

- 1 開会
- 2 議事
 - (1) 基調報告
 - (2) 意見交換
- 3 閉会

1 開会(市長挨拶)

第2回も委員のみなさんにはご多忙の中お集まりいただきお礼を申し上げます。第1回は内川未来戦略会議のゴールイメージの共有をテーマに意見交換いただいた。他の地域でもご活躍している委員のみなさんから、事例をご共有いただき、内側の持つ価値の言語化への問題意識を共通認識として持つことができました。

この第2回からは個別のテーマを設定し、内川の価値や目指すべき未来の可能性を探っていききたい。今日のテーマは「稼げる観光と祭りの持続可能性」。祭りについては内川新湊の持つ大きな魅力の一つであり、保存継承は喫緊の課題だと認識している。今回、報告いただく永谷委員は全国で祭りの収益化や持続可能な祭りのあり方に貢献されている。また、五十嵐委員は越中祭青年会の他、富山県内の祭りや石川県の祭りの継承活動にも携わっている。貴重な意見を聞かせていただくと楽しみにしている。

以上をもって開会の挨拶とさせていただきます。

2 議事

(1) 第1回会議ふりかえり

【高木委員】

・第1回では、内川の本来あるべき姿や内川を地域レベルで魅力を高めていくことが命題であると設定した。現在の内川では、内川の持つ価値の共通認識がなく、地元民や移住者が個別に活動している状態。

・内川がエリアとして価値を發揮していくためには、また、10年後、20年後にどういう未来を目指したいのか共有認識を持てるようにしていかなければいけない。

- ・そのために本会議では内川の持つ価値を言語化、可視化することで、その価値を共有できる状態にすることを旨とする。
- ・また、本会議では地域の持つ「○○っぽさ」が共有されることはブランドイメージの強化と向上に繋がると考える。例えば前は鎌倉が例に出た。「鎌倉っぽさ」が完璧に言語化しきれてはいないが、鎌倉のライフスタイルや鎌倉は何を大事にしているかが地域内外の人の間で一致しているイメージがある。また、瀬戸内であればしまなみ海道の景観など、その地を訪れる期待感が記号化されていることで、観光ブランドが確立している。本会議では「内川っぽさ」を見つけたい。
- ・内川の課題のひとつに、観光客の多くが写真を撮っているが、消費行動に繋がっているか不明瞭なことだ。そもそも観光客の綺麗な写真が撮れるという内川への期待の持ち方は正しいのかを問い直さなければいけない。写真を撮るだけの観光客が大量に来るよりも、地元との繋がりや消費行動をする観光客を集めることに注力することを考えても良いのではないかと。
- ・また、内川の魅力は「静けさ」であるという意見が多く出たが、「静けさ」を維持するためには観光の高付加価値化は避けられない。観光客を受け入れる地元の人の姿勢も考えていく必要があるだろう。
- ・そもそも、地域外の人に内川とどう関わってほしいのかの整理がされていないことも課題だ。観光なのか、移住なのか、内川の関係人口の理想像の整理がなされていない。
- ・内川の持つ魅力については幅広い意見が出た。静けさや海と川が側にある暮らし、開放感やノスタルジックな町並み、祭りのパワー、地元住民の熱い思いなどが挙げられた。これらをヒントとしながら、各委員の報告から様々な視座を得て、最終的に内川の価値をアウトプットし、10年後20年後の内川をどうしていくのかを考えていきたい。
- ・以上の議論により、第1回では内川の価値の一つの答えを出すのが本会議の意義に設定した。

【牧田座長】

- ・本日は永谷委員と五十嵐委員に報告いただき、意見交換する回としたい。
- ・まず、永谷委員から報告をお願いしたい。

(2) 基調報告

【永谷委員】講演資料に基づき説明

- ・本報告では、今の日本の観光市場やインバウンドの動向を踏まえた、内川の観光のあり方をお話させていただきたい。
- ・現在の日本の観光については、ニュースでご覧になることも多いと思うが、日本はGDP等様々な順位において下落傾向にある。ただ、観光の数値を見ると25年目標を23年で達成するなど、数段先んじて目標数値を越えている状況にある。
- ・達成しているのは消費額や訪日客数。一方で、全く達成に届いていないのが、持続可能な観光に取り組む地域。目標は100地域を目指しているが、全く増えていない状況にある。要は、地方の観光地には大量の人が訪れているが、受け入れはできていない、マネタイズもできていないという、遅れている状況にある。
- ・ただし、日本ほど観光において魅力的なところはない。日本には革命が起こらなかったことから、文化財はほとんど残っており、自然の魅力で見ても国立公園が34か所。また、四季があることで、同じ場所でも3ヶ月くらいで違う景色を見ることが出来、違うものが食べられる。食で言っても、世界においても日本の食事はおいしいことで知られている。ポテンシャルしかない状況。
- ・世界の行きたい国や魅力的な国のランキングでも、日本は3位以内に必ず入る。また、大きな変化では円安で増えていることも要因として挙げられる。ただ、円安でありながら、買い物の消費は実は減っており、体験の消費、具体的には宿泊費が増え、日本の滞在期間が長くなってきているのが昨今の動向の特徴。
- ・日本の消費額は上がり、5兆円を超えたから良かったということではない。というのも、実は円で見ると消費額は上がっているが、米ドルや中国の元で見た時、実は2019年と変わっていない。扱っている金額は一緒のため、たくさん得をしているだけのため、海外メディアでは日本は貧乏な人たちが観光に行く国だと記事になることも多い。
- ・しっかり観光客の受け入れ体制を作らないと、このままでは日本は本当にオーバーツーリズム化してしまい、消費してもらえなくなる。日本観光のリピーター率は65パーセント。さらに、日本に3回以上来ている人たちは5割もいる。
- ・その中で、一度地方に行ってみたものの情報がなく、何も体験できなかった観光客も多い。例えば、神社に行ったものの、検索してもその神社がどのようなものなのかがわからず、体験価値が低い傾向にある。よって、再び都市型観光に戻ってきてしまう状況にある。

- ・富山県はランキングでは27位。国内旅行では石川県に訪れる観光客が多く、石川県から富山県にも来ることが多い。また、新幹線を延伸したことで、45位～46位の福井県も観光にかなり力を入れてきている。よって県周辺も含めた観測から、今後、富山県でもインバウンドの営業が増えてくることが予想される。
- ・世界的に見ると、旅行スタイルはFIT（個人旅行）が主流となっており、特に狙いたい欧米人の9割がFITで訪れている。これに対して、東アジアでも7割近くがFITで訪れるようになってきている。価値を発信し、お金を使える場所であることを発信しないと、ただ場に来るだけになってしまう。このような状況から、情報発信を強化し、観光客に対して価値ある体験を提供することが重要である。
- ・観光情報の流入源としては、検索エンジンやSNSが主要な手段となっている。GoogleマップやGoogleレンズを使うことで、言語の壁がほぼなくなっており、今後はAIを活用した検索が主流になると予測される。しかし、デジタル上に情報がなければ検索結果に表示されないため、情報のデジタル化が不可欠になってくる。
- ・トランスフォーマティブ・トラベルが最近のトレンドであり、その時にしか体験できないことが消費の中心となっている。例えば、桜や紅葉の時期、ほたるいか漁の体験などが人気である。また、日本の観光地ではレスポンスブル・ツーリズムが求められており、訪れた場所への寄付や貢献が重視されている。特にフランス人やドイツ人を中心にした意識の高い観光客に多く、彼らは人生観を変えるような体験を旅行に求める傾向にある。
- ・射水市の観光については、静かな町並みや景観、人々の生活が紡いできた歴史が魅力だ。しかし、観光で稼ぐためには、ターゲットが設定されているか、そしてそのターゲットが実際に消費を行う場所があるかが重要。富裕層だけでなく、さまざまな層の観光客が訪れることが予想されるため、それぞれの層に対応した受け入れ体制が必要になる。
- ・現在、富裕層が来る場所は宿しかほぼ無い状態。例えば一泊20万円以上の宿しか無い地域では富裕層しかいないが、いわゆる観光資源のあるところでは、富裕層から客単価の低い観光客まで混合している状態。観光で稼ぐためにどのくらいの比重をかけていくのかを、内川の未来を見据えて考察していかなければいけない。
- ・例えば、富山に行くついでにどこか地域を訪れようと思いついた観光客が、Instagramで綺麗な写真がアップされていたことをきっかけに内川を知ったとする。しかし統一されたハッシュタグもない状態。ではGoogle「富山 内川」で検索すると、今の上位結果は野球選手、VISIT富山、富山県のサイト、射水市のサイトで、なかなか情報が拾えない。
- ・集められる情報も、浴衣を着て内川を散策し、カフェに立ち寄って、写真を撮る女性の傾向が強く、可視化されているターゲットが結果的に女性向けになってしまっている。京都や浅草でも懸念されていることだが、オーバーツーリズム化することで、このままでは内川にある魅力的なコンテンツが富裕層から目を向けてもらえなくなる可能性がある。
- ・観光は点ではなく、地域全体で捉えるべきだ。射水市や富山県としても、分散化周遊型で観光を考えるべきだと考える。現在、内川は「日本のベニス」として知られているが、カフェや和装のコスプレなど、マス観光地としてのイメージが強くなっている。これらの点についても、地域の方々が決めるべきことなので、共に検討していく必要がある。
- ・ただし、内川を認知していない人から見たこの土地はカフェ・和装・写真になっている状況にある。
- ・そこで、内川には観光資源の開発、プロモーション、ブランディングをしていかなければいけない。隣の氷見市や射水市は同じエリアで紹介されることが多いが、海に臨んでおり、おいしい魚介が食べられる点では被るところも多く、差別化を図っていかなければいけない。
- ・具体的には海王丸パークや新湊きつときと市場も頑張っていかなければいけない状況だと考えている。また、内川には空き家もたくさんあるので、本格的な空き家プロジェクトを設計し、地元の方も観光客も楽しめる受け皿を増やしていく。せっかくの川の美しさを活かし、オープンテラスのような気持ちよく川を眺めながらくつろげる空間を作ることできると思う。
- ・遊覧船や漁船を活用して、船上で寿司を食べられるイベントや、ナイトクルーズ、クルーを付けた撮影など、単価を上げていく企画を作ることもできると思う。
- ・内川に本当に何が必要なのかをちゃんと設計しながら、一部は市が買い上げるなどして守っていく。あるいは官民連携組織を活用した運営も検討していきたい。
- ・また、景観条例の制定も検討していかなければならない課題だと思う。
- ・新しい体験を開発することはなかなか難しい。今ある価値ある体験の単価を上げていくことがまずやるべきことではないか。
- ・令和5年の中期計画については、昨年立ち上げたばかりと思うが、具体的なアクションが見えづらい状況である。KPI設定や実施項目を明確にした方が良い。個別の点で考えることは難しいため、観光の振興計画と連携し、3年かけて行うべきこと、10年かけて行うべきこと、そして即時に実施できることを策定しながら進めていくべきだろう。
- ・現在、祭りは鋭意実施中だが、富山県内に祭りは数多く存在し、その魅力も豊富である。しかし、現状ではほとんどマネタイズができていない。今回、多くの地域から手を挙げて

いただいたが、春の山王祭りに関しては観光庁の事業の関係で、準備が間に合わなかった。現在、おわら風の盆や海老江曳山まつり、新湊曳山まつりの準備を進めており、来週リリース予定だ。

・祭りは市民のものだが、マネタイズを考えると県外や市外からの訪問者をいかに引き込むかが重要。保存会の中には「祭りは儲けるものではない」という考えもあるが、祭りが続けられなくなるほどの状況であれば、マネタイズを考えなければならない。有料観覧席の設置などはその一例であり、ねぶた祭りでも成功している。

・しかし、人手が不足しているため、無理な呼び込みは避けるべきだ。オープンテラスやホールのような観覧席を設置し、曳山を見やすくし、より多くの人を楽しめるようにする試みも行っている。また、祭りの体験を販売することも有効だ。建物の上に乗る体験などは台湾からの観光客にも人気で、来年はさらに大きく展開する予定である。

・宿泊施設との連携も重要であり、少ない宿泊数を富山市のホテルと協力してツアーとして販売することも検討すべきだ。地元の人々は祭り当日に参加しているため、祭りを楽しむ余裕がないことが多い。この点を踏まえ、観光客に地元の料理や文化を体験させ、リピートを促す仕掛けが必要である。

・また、地域の方々からの協賛金も重要だ。現在 200 万円ほどが集まっているが、さらに協力を呼びかけ、収入を増やすことが必要である。これからリリース予定の親部町の推活グッズや、祭りを応援するグッズ販売などもその一環だ。アイドルの箱推しのように、祭りを推せるようなコンテンツ作りも、収益を増やす可能性がある。また、動けるコンテンツはポテンシャルが高く、獅子舞が Instagram で人気を博しているケースもある。

・最後に、祭りを通じたプロモーション活動は難しいが、魅力的な体験を提供し、観光客のリピートを促すことが重要だ。そのためには、国内外のイベントへの出演や、プロモーション活動の強化が求められる。祭りは地域の魅力を伝える絶好の機会であり、これを活かして観光を振興することが重要だろう。

・観光資源の発信と広域での連携を行い、体験価値を向上して、良質な観光客にリピートしてもらうことが、今後の内川の観光戦略において重要であると考えている。

【五十嵐委員】講演資料に基づき説明

・富山県内の祭礼行事には、山・鋒・屋台行事、獅子舞行事、越中八尾おわら風の盆などの伝統行事があり、お祭り県として知られている。

・全国各地の祭礼が地域課題を抱えており、少子高齢化による担い手不足や、維持管理における費用面の問題、コロナ禍を経て祭りのあり方が変化し、祭り離れが深刻化していることが挙げられる。実際に祭り自体を止めてしまった地域も少なくない。また、地球温暖化による天候の変化で開催時期の変更に迫られている祭りもある。

・このような課題に対し、越中祭青年会を発足し、解決を試みている。

・もともとは、新湊地区や伏木地区青年交流会の集まりだった。交流会の理由はもともと文化圏としては近いながらも、交流がほとんどなく、祭礼日も近かったため接点を持っていなかった。しかし、コロナ禍で祭りが開催できなくなったことで、祭りに向けていたパワーをなかなか向ける先を見つけれなかった。コロナが明けたら一層祭りを盛り上げていこうという同じ志を持った仲間として集まった。

・越中青年会では定期総会における意見交換会で横のつながりを強化し、コロナ禍の中で祭りを運営していく知見を共有。地域と連携して祭りのあり方を共に模索している。曳山囃子・祭囃子の継承活動にも注力している。町内の子どもたちにも伝統芸能に触れる機会を作っている。

・横のつながりをきっかけに、各地祭礼参加に協力している。地域同士の繋がりができ、他の地域の伝統芸能に触れて取り入れることで、知見を広げることもできている。

・SNS の情報発信も行っている。

・石川県とも垣根を超えて伝統継承のあり方も模索している。互いの祭りにも参加し合い、交流を深めている。

・このような活動は NHK の番組でも紹介された。自治体における若者同士の交流は地方の課題であり、祭りというハレの日を通じて深まる関係性が、課題の解決に貢献できると考えている。

・祭りが持つ地域社会の役割は幅広く、NHK の番組でも紹介された地域コミュニティの役割や、地域外に向けた地元の PR、地域の活性化や観光資源としての側面、地域経済への好影響、神事として人びとの祈りの場としても機能する。

・稼ぐ観光のために、昨年の曳山祭りで「ヨバレおもてなし」という施策を行った。「ヨバレ」とは富山県と石川県を中心の慣習で、祭りの日に知人友人を家に招いてごちそうを振る舞う。祭りの開催を喜び楽しむ場を作り、祭りに貢献したい若者を空き家や空きスペースに招き、実際に寿司職人を招いて新湊の魚を楽しんでもらった。また、ヒノキの枡を積み上げて、奉納酒を飲むイベントも行った。10 分ほどで用意していた 300 杯が無くなった。

・また、ナイトクルーズ観光と獅子舞のコラボレーションも行った。曳山は大きな祭りなので補助金などの支援も充実している。しかし、獅子舞は地元の小規模な催事で、援助を受けることは難しい。

・そこで、地域内外の方に楽しんでもらうイベントとして、夜に獅子舞を楽しめるイベントを行った。子供も体験できる親しみのあるイベントになった。神事として厳かな側面も大切にしつつ、これからも祭りを存続させていくためにこのような機会も作っていききたい。

・稼げる観光のためには、地域の商品価値を知ること大事だと考えている。もともと内川には目立った観光スポットが多くはないが、「何気ないものを財産に」すべく、ほたるいか漁など、地域住民ならではの視点で価値を理解しようと活動している。

・まだまだこれからもできることがたくさんあると考えている。例えば、岩城観光協会が出している「岩城おじさん図鑑」では、地元の魅力的な住民を紹介しているまたNOTOWILDという能登町の若者があばれ祭りを発信している。若者発信のグッズや商品開発など、若者が観光にコミットしてできることのポテンシャルは高い。

・祭りに参加している人、見てくれる人はみんな良い笑顔をしている。時間はかかるかもしれないが、みなさんの笑顔を守っていくために、祭りの継続・発展のために貢献していきたい。

(3) 意見交換

【牧田座長】

・永谷委員と五十嵐委員の報告に対して、各委員から順にご意見を伺いたい。

【中川委員】

・永谷委員の報告にあった戦略設計や価値観の言語化が非常に大事だと改めて感じた。

・祭りでいかに稼げるかという観点でコメントすると、永谷委員も仰っていたように、曳山のような移動の多い形態では有料の固定観覧席を設けることは難しいと思った。

・解決策のひとつとして、ガイドを設けるアプローチはどうか。先日、岩瀬の曳山祭に行った際、地元の方に案内いただいた。ガイドの方が各地点の曳山の通過時間を把握し、見どころを教えてもらいながら町を連れ回してもらい、非常におもしろかった。内川の祭りでも有料の観覧席を複数設け、移動して見ることができると良いのではないかと併せて、ガイドが飲食や内川観光も含めて案内しながら楽しむような「豪華ガイド付き動ける観覧席」のようなやり方があると思っただ。

・五十嵐委員の「何気ないものを財産に」という考え方にとっても共感している。例えば、ガイドを中心に内川の「何気ないもの」をしっかりと価値化しながら、町のお金を稼げる場所に繋げていくやり方もできると思った。

・永谷委員の発表にあった提灯協賛で思い出したが、自身の住む東京・中目黒の桜の祭りの時期にも提灯がたくさん並ぶ。提灯は一般人でも協賛して吊るすことができ、地域にボーイズグループ EXILE の所属事務所がある関係で、「EXILE 大好き」や推しメンの名前が書かれた提灯も多い。内川や井波は映画やドラマ、アニメの舞台にもなっているので、ファンの推し活の一環とし、推しのコンテンツやキャラクターへの想いを表現できる機会として提灯協賛を提供し、提灯と一緒に写真が撮れるなどして聖地巡礼をしてもらうことで更にお金を落としてもらうような誘致のやり方ができると思った。

【福田委員】

・みなさんにとって「お祭りは稼ぐ機会」という共通認識で合っているか？祭りにも様々な年代やレイヤーの方がいると思うが、それぞれにとって祭りとはどういうものなのか。基本的には「お祭りで稼いで良いよね」という共通認識があると良いと思った。

・私にとってのお祭りは稼ぐ機会。移住者の移住のきっかけはほとんどがお祭り。お祭りは一気に地元の色々な住人と繋がることのでき、地元の雰囲気を知ることができる。お祭りで「やっぱりこの土地が良い」と思う方が多いので、不動産会社としてはビックイベント。

・ただし、自身が「お祭りは稼ぐ機会」にできているのは、地元の地域との共通認識が取れているから。

・現状の内川では祭りに対する認識に違いがあるのではないかと。祭りに対する認識を整理すると良いと思った。

【明石委員】

・永谷委員の報告をきき、内川だけでブランド戦略を考えては駄目だと改めて思った。内川観光は海王丸パークから出る観光遊覧船とセットで考えたい。海王丸パークから内川を通り、富山湾へ出て再び海王丸パークへ行く。以前は湧だった地形や歴史、漁業や工業地帯などの現在の産業まで、パノラマで感じられるコンテンツだ。観光船はとても良いコンテンツなので、来外者には特におすすしめしている。船上ガイドをもっと充実させること

で、もっと魅力や体験価値を上げられると思う。

・五十嵐委員の報告のスライドの色が南立町のカラーである紫色を見て、「推し活」という言葉を思い出した。好きな町内の色や欲しい模様がみなさん密かにあると思うので、素敵でデザインでグッズ化したら購入者がいるのではないかと思った。

・曳山の到着時間は主要スポットでは決まっているが、その他のエリアはいつ曳山が来るかわからない。経営するカフェには、専用駐車場はあるが、変則的な通行止めや時間の読めない巡行に対して、土地勘のないお客様を個店がダイレクトに受け入れるのはとてもハードルが高い。祭りの日に予約したいという連絡をいただいていたが、大切なお祭りの日だからこそ、自分たちがしっかりと曳山を迎えたい、楽しみたいという気持ち強い。無理にイートインをせずテイクアウトのみで縮小営業する予定だ。

・曳山や獅子舞は初めて見る人は圧倒されるが、あまりに凄くてどう見てよいのかわからないという課題もある。中川委員の発言にもあったように、その人に合ったガイドが説明してくれるととても良いと思う。例えば、射水市観光協会が出している曳山のパンフレットは、毎年同じような写真が掲載され順番で紹介されているのみ。曳山の標識やつりの解説や「イヤサー」という掛け声など言葉の意味や由来を伝えるだけでも、見方が変わる。少しの工夫で、初めて訪れた方でも楽しめるわかりやすいガイドや説明ができると思う。

【加治委員】

・永谷委員の発表は、観光で稼ぐということであれば、まさに発表内容にあったようなことをやっていかなければいけないと思い、非常に勉強になった。

・偶然、昨日に曳山協議会の会長のと話す機会があり、招致の協賛は私もおいたので、実現するかかわからないが、機会があれば地元の人間としてやっていきたい。

・五十嵐委員の発表は、祭りがなぜ持続可能ではないのか、何が問題なのかということをもっと知りたいと思った。例えば、人手不足ならば、町内13区のとどこが特に少ないか等分析していけば、問題解決の糸口はあるように思った。

・祭りを持続させていくための課題は個々にたくさんあると思うが、具体的な対策を議論する場はおそらく無いと思う。町内の問題として捉えて、商工会議所や人材を抱えている組織に助けを求めれば、人では集まるのではないかと思った。

・伝統的な祭りではないが、音楽フェスという形のお祭りを開催している。この祭りでは、集客人数や協賛金をいただいている企業、年齢を出すことができている。情報をとり、問題を分析して話し合いができれば、実は解決できることもあるのではないかと思った。

【野口委員】

・永谷委員の発表にあったしろえび漁の観光は、まさに我々が行っているが、漁の観光だけではなく、宿泊施設等いろいろな方とタイアップし、観光客を呼び込もうとしている。

・しろえび漁に来てくれる観光客は、突き詰めると海産物を食べたいから来てくださる。我々も獲り立ての海産物をその場で食べさせてあげたいという思いもあるが、マンパワーでは状況を打開できない状態。

・永谷委員の発表を聞かせていただき、色々考えていくことができれば、もっと人を呼び込めると考えた。

・五十嵐委員の発表について、祭りでは自分は世話役の立場だが、実際には人手が集まらず、一家総出で参加している状態。祭りで人を呼べるかと言うと、知っている人は見に来てくれてももてなしに手がまわらず「勝手にやってね」といった状態。五十嵐委員が取り組まれている空き家を活用し飲食の提供を市外の方にお任せする施策は、自分は知らなかったが非常に良い取り組みだと思う。空き家活用は、内川はどこを探しても空き家があると思うので、制約はあるかもしれないが、市や観光協会とも連携するなどして広がっていけば良い。

【木村委員】

・永谷委員の報告で観光船についても言及いただいたが、「あぐら」をかいているところもあったかもしれない。

・報告の前段の話として、海王丸パーク一帯を含めて観光を考えるという視点は、我々も日頃意識して考えていたところではある。

・ただ、外部と連携するところは弱いので取り入れていきたい。例えば、船に乗りながら謎解きをし、地域の文化や歴史を学ぶなどはすぐに実行できそうだった。

・祭りの日は、確かに新湊の食事は食べられない。とても忙しい日なので、いつも買ってくる地元の人々の注文を優先させてしまう。この現状に納得はしているが、内川をお祭りで稼げる土地にしていくと皆で決めたのならば、外部人材の登用や業者とのコラボ・協力によって、私たちがお祭りの日に食べられるようなものを、観光客にも提供できる方法について、みんなで模索することが必要だと思った。

【高木委員】

・永谷委員の発表で、内川をエリアとして打ち出していく必要があると思った。「内川」

と一括りに言っても川沿いだけを指すのではなく、漁港から染み出す生活圏でもあると思う。海王丸パークとその遊覧船を含め、呼称はともかく、一つのエリアとして認識してもらった方が良く考えている。

・我々の認識としても回遊性を上げてコラボレーションしていくことを目指し、外部へ発信する際も「この一帯のエリアで楽しんでください」と打ち出していく必要があるのではないかと。

・観光スポットが分散していると言うが、実際は言うほどに離れていないのではないかと。遠くから来た人にとっては一つの文化圏。観光客の視点から見て、海王丸パークを目当てに来ている人もいれば、漁港というテーマで見に来ている人もいれば、持ち時間で楽しんでいる人もいる。エリアで協力し合ってそれぞれで体験できるものを用意すれば、今のよう写真撮って帰ってしまうようなことにはならないと思う。もっと実際の内川の暮らしに近い体験や生活文化を味わえるような体験を提供できるようになるのではないかと。

・まずは「内川」に対する捉え方を変えていきたい。

・五十嵐委員の発表は、自身も祭りに参加していたので懐かしさを感じながら聞いていた。

・NOTONOWILDという能登の祭りのプロジェクトのホームページを見て、まさに新湊みたいだと思った。第1回会議では内川の「静けさ」が魅力だという話題があったが、地元の漁師が休んでいる昼間来る観光客の視点だと思った。内川の住民の視点から見れば、NOTONOWILDのようなやんちゃな世界観があると思う。この陰と陽の世界観をどう観光として魅せていくのかを考えてもよいのかもしれない。一つの地域に色々な側面があることは素晴らしいことだと思うので、自分は内川の陰と陽について考えていきたい。

【牧田座長】

・委員のみなさんから貴重なご意見をいただき、心よりお礼申し上げます。

・永谷委員の報告からは幅広い視点から示唆をいただくことができた。特にコト消費とイミ消費という観点は重要であると感じた。

・五十嵐委員の報告からは、内川における祭りの意義を考えるべきだと思った。福田委員の意見にあったように、祭りを観光の資産と見なしてよいのかなど様々な問題が関わってくるだろう。しっかり対話を重ねていくことが大切だ。

・加治委員のご意見にあった、祭りに参加できる地元人材の現状分析の提案は、言い換えれば「ファクトベースで現状認識をしているのか」という問題提起だと受け取った。実際、我々は自身の感覚で見当を付けて考えてしまいがちかもしれない。事実をベースにして考えていけば、意外とこれまで見えなかったものが見えてくるのではないかと、重要な示唆をいただいたと思った。

3 閉会

【夏野市長】

永谷委員と五十嵐委員には貴重な報告をいただき、また委員のみなさんにいろんなご意見を頂戴できた。行政としてしっかり受け止め、戦略に活かしていきたい。

行政側の立場からの所感として、永谷委員の報告にあったエリアをしっかり繋げ、マネジメントしていく必要性は強く共感した。行政としてハードの環境を作っていけるよう意識して計画を策定していきたい。また、観光資源計画の見直しも意識的に行っていかなければならないと感じた。

五十嵐委員は様々な方々と繋がり、祭りを盛り上げていただいております、大変頼もしく思った。人材確保のためにはファクトベースの検討が必要とのご意見もあったが、文化財を守るための資金確保についても気になった。例えば衣装一つとっても着用すればクリーニング代が必要になる。文化財保持のための資金を、収益から充てていくことができれば、持続可能性に繋がっていくと思いき、意識していくとよいのではないかと。

・次回会議の報告テーマは、「地域の価値をあげるエリアマネジメント」。貴重なご意見をいただきながら、未来戦略の立案を進めていきたい。どうぞよろしくご意見申し上げます。